

らずに帰って来たので、聞くと先客がいたので帰ったと云う、変だと思い行つて見たら警察の家族が掘っていた。

母は誰にも話すなと言う。警察だつて上からの命令でやったことなのだ、家族までつらい思いをさせてはいけないのだと云つて、全部掘つて行つても、家族が助かるならば良いではないか、と言つて全く寛大なものであった、心の広い、暖かい心を持った母であった。

その内に食糧も配給となりましたが、よそは黒パンのガチ／＼だったが我が家は白パンであった。これも母が困っている人を助けたことなどが廻り廻つて、私達も安穏な生活ができたことを母に感謝したものです。

昭和二十二年五月、たしか第一回目の引揚船で、ニコライさん夫婦も見送りに来て、係に手を打つてくれたものか、大泊の港はゴツタ返していたのに、父母と私と姉と甥の五人は行列で長時間待つことなく、早々に乗船できたことは、母がいつも、朝鮮人、中国人、ソ連人などの分け隔てなく付き合ひをしたお蔭であつ

た、無事函館に上陸して母の至誠が天に通じ、神佛の守護があつたものと思うのでした。

引揚げた父は三十九年に、母は五十四年に亡くなり、今は大野町の墓地に眠つております。

私は母の真心の姿を見て生きてきました、いつの日か社会の皆さんに少しでもご恩返しができることを考えながら余生を過しております。

やっぱり祖父はやられていた

北海道 松村 重博

国破れて、山河あり、私が終戦の詔勅を聞いたのは、疎開先の樺太、豊真線二股と云う小さな村であつた。

詔勅を聞きながら只遠くの山脈を見つめていた、田舎の小学校で、真岡の小学校とは異なり特別に勉強をしなくても、お寺の坊さんの息子に続いて二番目の成績だった。

詔勅の放送を聞いた翌日、母は急遽、私を迎えに来

て女子供（十五歳以下の男子）老人は全員引揚命令が出て十二歳の私も祖母、母と一緒に引揚ることになったと云う。

さて一年半くらい前に遯る、火事だあ、外の大声と共に、私のところの裏口へ近所のお茶屋さんの主人の知らせに、外へ飛出すと、公会堂の火の手は驚く程の火災に包まれ、真岡の夜空を、真赤に染めていた。

折りしも小浜町長さんの葬儀での参列者は多くの悲しみに包まれていた。

人々は、「町長さんが公会堂を連れて逝った」と申され、今にして思えば、豊かな真岡の命運も此の時より、傾斜への路を歩むのであった、何とも云えぬ悲しみに浸ったものでした。

引揚げの準備は何もない、着物と下着くらいのものでしたが、此のようなものでも、私には、生まれて初めての荷物でした。

家の誰もが岸壁へ出払っていた、私は最後に自室を去るに当り、丁重に頭を下げて「さようなら」と小さく口にして瞬時の別れを告げたのであった。

父は何度も浜の私共のところへ来ては、戻り、又来るのです。最後に、何か手に握らせたのは、愛用のハーモニカだった、父の心を察し、居ても立ってもいられなかつた極限だったのでしよう。

ボンボン船は、午後四時頃次々と真岡を離れて行きました。私も小さな体をデッキに託して、「きつと又帰れるでしょう」と真岡に別れの言葉を残して、船は段々と遠ざかつて行つた。

何十隻もの漁船が、一緒に出港したが、すでに真暗になり、夜空を見上げながら今までの惨状を思い出していた。

敗戦の宣言をする前のこと八月九日、ソ連軍は突如空爆すると同時に樺太の国境を突破し、攻撃を開始した。

まさかソ連が攻め入るようなことは誰しも考えていなかったのである。樺太は一変して上を下への大混乱となった、樺太鉄道の最北端で終着駅の敷香へと、内恵道路は恵須取、塔路方面からの避難民で長蛇の列となり、病人、老人、女子供、行軍に遅れた人は置き去

りである、その列を目がけて機銃掃射を繰り返す。まさに地獄の有様であった。大きな子供を背負い、小さい子は前に、手には水筒と子どものオシメ、長歩きもしたことはない母親、あなたは一体何キロ歩くことができるでしょうか。

道路わきには次々と倒れた人で累々たるものであったと云う。

八月十五日敗戦の宣言の後もおも艦砲射撃が続き、真岡は火の海と化し、日蓮宗寺の太鼓は町の隅々に響きわたり、真岡の最後を告げるかのようであった。祖父は殺されてもいゝから水を呑みに行くと言つて出て行つた、私達は倉庫の梁の上に身を隠していた。ソ連軍が自動銃で鍵を射ち抜いて内部へなだれ込んだ時の恐ろしさは、上から見ていて生きた心地もなかった。

やっぱり祖父はマンドリン銃（自動小銃で弾倉が丸くマンドリンを抱えたように見える銃）で体全体を射ち抜かれて倒れていた。

私達の乗つた小さな密航船は無事に、稚内港に入つ

た。

亡き夫の労苦

北海道 嶋崎 玉美

私達は樺太の泊居からの引揚げで昭和二十二年七月、小樽に引揚げて参りました。

主人は小樽に生れ、小樽高商の第三回卒業生です。

昭和二年、樺太久春内の信用組合に書記として勤務いたしました。

昭和十年七月、泊居一徳信用組合に転勤。当組合は不良貸付けのため、倒産寸前のありさまで、建直しを命ぜられ、樺太庁より官選理事として、懸命に勤務いたしました。努力の甲斐あって立派な組合となり、貯金もどん／＼ふえまして、貸付けもふえ、時の樺太庁大津長官から表彰されまして、緑綬功労章をいただきました。

ほんとうに努力する真面目な人でした。